一　次の(1)～(10)の各文の傍線部を漢字に直したとき、それと同じ漢字を含むものを、下の各群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 1 ～ 10 。

(1) 古い制度をハイシする。

1
① 神社でハイレイをする。
② 人心のコウハイを憂える。
③ ライバルチームにハイボクする。
④ 山をハイケイにして写真を撮る。

(2) 法律のジョウコウを読む。

2
① 緊張で身体がコウチョクする。
② 党のコウリョウを改訂する。
③ 複数のコウモクの中から選ぶ。
④ コウゲキの手を緩めない。

(3) 意見にイッカンセイがある。

3
① カンゴ学校に通う。
② カンヨウな心で許す。
③ 社会のコンカンを揺るがす問題だ。
④ トンネルが山をカンツウする。

(4) エイリな刃物を扱う。

4
① 物語の主人公に自己をトウエイする。
② 子孫のハンエイを願う。
③ 現在エイイ製作中である。
④ エイギョウジカンが終わる。

(5) ザンショウが空を赤く染める。

5
① この文学作品は作者がミショウだ。
② 複数の文献をショウゴウする。
③ 政治の実権をショウチュウに収める。
④ 塩のケッショウを顕微鏡で観察する。

(6) クウソな議論をやめる。

6
① 地方のカソカが進む。
② 毎日のキソレンシュウを欠かさない。
③ 人類のソセンについて研究する。
④ 店の常連客にソシナを渡す。

(7) 総理大臣がダンワを発表する。

7
① 有名なゲキダンが公演をする。
② ダンリョクのある素材を使う。
③ 友人に悩みをソウダンする。
④ 講演会の講師がトウダンする。

(8) 事業の資金をユウズウする。

8
① ユウキを出して立ち向かう。
② ヨユウをもって行動する。
③ ユウビンが届くのを待つ。
④ 氷がユウカイする。

(9) 計画の変更をダシンする。

9
① モンシンヒョウに記入する。
② 今後のホウシンを発表する。
③ 書類の発行をシンセイする。
④ シンシテキな振る舞いを心がける。

(10) まさにインガオウホウである。

10
① 新しい政策についてホウドウされる。
② 今年は作物がホウサクであった。
③ 自分へのごホウビを用意する。
④ ホウケンテキな社会制度を調べる。

二　次の文章を読んで、後の問い（問1～9）に答えなさい。

ＬＩＮＥで書いたことはスクショされ、自分の知らないところで出回ってしまうかも知れない。それを恐れて、ＬＩＮＥで本音を書いて送ることはできない。筆者も学生からそうした声をよく聞く。

このような不安があれば友達に本音を話せないのは当然である。しかし、カント(注1)の立場に従うなら、本音を話せない友達は本当の友達ではない。それでは、A友達に本音を話すために求められる条件とは、いったい何なのだろうか。

カントによれば、それは、友達が決して自分を裏切らないと信じられることである。当たり前と言えば当たり前だが、彼はそこに、友達が果たすべき「義務」があると考える。すなわちそれは、「自分に伝えられたその秘密を、どんなに信頼できると考えられても、他人には当人からの明白な許可なしに伝えてはならないという義務」に他ならない。誰かと本当の友達になるためには、そうした義務を果たさなければならないし、また、相手がそうした義務を果たしてくれると信じられるからこそ、私たちはその人と友情を交わすことができる。

このような表現は人を当惑させるかも知れない。「義務」などという言葉を聞くと、まるで法律のように、私たちに対して外側から強制的に押し付けられるルールのような印象を受けるからだ。そうしたルールなど関係なく、自由に互いを思いやる関係が本当の友情なのではないか。本当に友達のことを大切に思うのなら、そんな義務など課せられていなくても、人間は友達の秘密を部外者に暴露したりなどしないのではないか。

しかし、カントの考えでは、人間はそんなによくできた存在ではない。友達の秘密を握ってしまったら、私たちはついそれを誰かに話してしまいたくなる。たとえば飲み会の席で、友達の秘密を暴露すればその場の話題を独占し、注目を集めることができるとき、そうした誘惑は非常に強力なものになる。

このように秘密を暴露したいという思いに駆られるのは、私たちがそれを「欲求」するからである。人間は誰だってそうした欲求を抱いてしまう。ただし、だからといって、「私」が友情を蔑ろにする(アをないがしろ)性格の悪い人間である、というわけではない。

むしろ欲求は――ここがカントの哲学のポイントだ――「私」に対して強制的に作用するのであり、「私」が本当は望んでいないことへと、「私」を駆り立てるものなのだ。この意味で欲求は「私」から自由を奪うものなのである。

欲求が自由を奪う。これは一見すると［1］表現のように思われるかも知れない。なぜなら一般的に、欲求を叶えることこそが、自由を実現すると考えられているからである。しかし、カントはそうした立場を取らない。むしろ欲求は人間を不自由にするのである。

B 欲求が人間を不自由にする。それはどういうことだろうか。別の例を使って考えてみよう。

たとえば「私」が空腹になって、ハンバーガーを食べたいと欲求したとする。このとき、実際にハンバーガーショップに行って、ハンバーガーを買って食べることができれば、「私」は自分の欲求を叶えることができる。

しかし、そもそも「私」は、空腹になること自体を自分で望んでいたわけではない。空腹を満たすためにハンバーガーショップに行くか否かは、自分で選択することができる。だが、そもそも自分が何かを食べたいと思うということを、自分で選択したわけではない。つまり食欲という欲求は、この意味で、「私」が自分で選んだものではなく、自分の意に反して強制されたものなのだ。だからこそ、食欲に従って行為することは、自分で選んだわけではないものに支配されることを意味する。つまりそれは「他律的」に行為することである。

これと同じことが、友達の秘密を暴露したい、という欲求にも言える。私たちは飲み会の席でつい注目を集めたいと欲求する。しかしその欲求は、「私」が自分で選んだものではなく、「私」に対して強制的に課せられたものに過ぎない。だからこそ、この欲求に従って友達の秘密を暴露するという行為は、自分の自由を放棄すること、他律的に行為することを意味するのである。そして、そうした他律性を乗り越えるためには、欲求とは異なる行動原理によって、つまり義務に従って行為することが必要である。

そうであるとすると、友達に本音を言えるためには、その友達がこうした欲求に抵抗することができる、という信頼が必要である。カントは、このように欲求に屈することなく義務に従って行為することを、「自律性」と呼ぶ。そして、自律性こそが人間の自由に他ならない。

では、私たちが従うべき義務とはいったいどのようなものなのだろうか。友達の秘密を暴露してはならない、ということは、一つの義務である。義務は、それが欲求を乗り越えさせるものである以上、欲求から導き出されるものであってはならない。では、義務はどこにその根拠を持つのだろうか。ここからがカント哲学の難解な部分ではあるが、できるだけ簡略化して彼の論理を再構成してみる。

義務とは一つの規範である。規範には大きく分けて二つの種類がある。一つは、「私」に対して、あるいは特定の人々に対してだけ当てはまる規範であり、もう一つは、すべての人々に当てはまる規範である。前者は特定の人々を特別扱いする規範であり、後者はすべての人々に等しく当てはまる規範である、と言える。後者は、やや形式的な言い方をするなら、普遍的な妥当性をもった規範である、と表現することもできる。

たとえば、「私以外の人は嘘をついてはいけない」という規範について考えてみよう。この規範は、自分を特別扱いする規範だろうか、それともすべての人々に等しく当てはまる規範だろうか。明らかに前者である。もしも「私」がこの規範に従って行為するなら、「私」以外のすべての人は正直なのに、「私」だけは嘘をつくことができるのだから、きっと「私」は多くの利益を享受することができるだろう。（i）では、この規範は「私」を自由にしていると言えるだろうか。（ii）

「私」が自分の利益を追い求める、ということは、「私」が自分の欲求に支配されていることを意味する。欲求は人間を不自由にする。そうである以上、この規範が「私」を自由にしているとは言えない。（iii）

したがって、自律的な人間が従うべき義務とは、すべての人々に等しく当てはまる規範でなければならない。たとえば、先ほどの嘘の例でいうなら、自律的な人間が従うべき規範は、「嘘をついてはいけない」（イ）と定式化されなければならない。自分だけを例外扱いしてはいけないのだ。（iv）

整理しよう。人間には本音が言える友達が必要である。友達に本音を言えるためには、友達が自律的であることを信頼できなければならない。人間が自律的であるためには普遍的な義務に従うことができなければならない。したがって、そうした義務に従って行為できる人間同士が、真の友情を交わすことができる、ということになる。「友達の秘密を暴露してはいけない」という規範もまた、こうした道徳的な義務の一つなのである。

カントは、このように相手に対して本音を言うことができる関係を、「道徳的友情」と呼ぶ。それは、互いに欲求に対して抵抗することができ、普遍的な義務に従って行為することのできる者同士の、友情である。

アリストテレスは、友情を愛によって結びつくものとして捉えていた。しかし、私たちが何を愛するかは、私たちには決められない。したがって愛だけでは友情を完全に自律的にすることはできない。それに対してカントは、友情を成り立たせる感情として、愛とともに「尊敬」を挙げている。道徳的友情とは、愛と尊敬によって形成される関係性なのだ。

もしかしたら、愛と尊敬はよく似た概念であるように思われるかも知れない。しかし、C カントにとって両者はまったく異なる概念である。

愛とは、他者の目的を、「私」の目的とする感情のことである。要するに、相手のことを自分のことのように思う、ということだ。他者が喜ぶことを「私」も喜び、他者が悲しむことを「私」も悲しむ。そのように他者に共感する、あるいは同情することが愛に他ならない。他者を愛するということは、他者が「私」から区別された、「私」と無関係な人物であると見なすことではなく、他者を「私」とある意味で同一視することなのである。

カントは、こうした意味での愛を「引力」に喩えている。すなわちそれは「私」と他者の間にある隔たりを解消しようとする働きであり、互いに近づき、できることならば一つになろうとすることなのである。

これに対して尊敬は、他者を「私」の目的のための手段として利用することはできない、という感情のことである。カントは、どのような人間も単なる手段として扱われてはならない、と考えた。それが人間の尊厳である。そうした尊厳を尊重することは、他者を自分の道具や駒にすることを、自分に禁じることに他ならない。

なぜ、人間には尊厳があるのだろうか。カントによれば、それは、人間が自律的な存在だからである。人間以外の動物は、衝動的な欲求に従って生きているだけであり、不自由である。それに対して人間は、道徳的な義務に従うことができ、その点で自律的であり、自由である。この自由こそが人間の尊厳の根拠なのだ。

したがって、他者を尊敬するということは、他者の自律性を尊重することに等しい。そしてそれは、他者が自分の思い通りにならないということ、他者には「私」が侵すことのできない自由があるということを、認めることである。それは、ある意味では、他者を「私」から隔たったものとして受け入れることでもあり、「私」と他者の間に距離を維持することを意味する。このような観点から、カントは、尊敬を「斥力」に喩えている。斥力とは、二つの物体が遠ざけ合う力に他ならない。

前述の通り、友達の秘密を暴露しない、という規範は、友情に課せられる一つの義務である。このような義務に従って行為できる人間を、私たちは尊敬する。飲み会の席であっても、決して友達の秘密を語らない人は、それだけで尊敬に値するのだ。そして、そのように尊敬するからこそ、「私」はその人間を道具のように扱ってはならないと感じる。そうした尊敬がなければ友情は成立しないのである。

カントによれば道徳的友情は、こうした、引力としての愛と斥力としての尊敬が均衡することによって、成立する。彼は言う。「友情（その完全性においてみられた）とは、二つの人格が相互に等しい愛と尊敬とによって結合することである」。D これこそカントの考える理想的な友情に他ならない。

カントはアリストテレスの友情論をどのように訂正したのだろうか。それは、友情が愛だけでは成り立たない、としたことだろう。なぜなら愛は自由ではないからである。私たちは、ただ相手を愛しているだけでは、依然として欲求に従っているし、他律的かも知れない。そして、そのように自分の感情に無抵抗でいるなら、状況が変われば、友達の秘密を暴露したいという欲求にも勝てなくなり、それによって友情を破綻させてしまうかも知れない。だからこそ、友情には欲求に抵抗する力、愛に抵抗する別の力が必要なのだ。それが、相手の自律性を尊重するということ、すなわち友達への尊敬なのである。

この意味において、カントは友情が自律的な関係であるという伝統的な友情観を、根本的に［2］したと言えよう。

（戸谷洋志『友情を哲学する　七人の哲学者たちの友情観』による）

※問題作成の都合により、一部省略・改変した箇所がある。

（注1）カント＝（一七二四～一八〇四）ドイツの哲学者。
（注2）アリストテレス＝（前三八四～前三二二）古代ギリシアの哲学者。

問1　傍線部（ア）「蔑ろにする」・（イ）「定式化され」は、本文中ではどのような意味か。最も適当なものを、下の各群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 11 ・ 12 。

（ア）蔑ろにする　11
① 憎んでいる。
② 強く疑う。
③ 重荷に思う。
④ 軽んじる。

（イ）定式化され　12
① 儀式的な意味を持たされ。
② 基本に忠実なやり方をされ。
③ 一つの決まった型にはめられ。
④ 広い範囲の中に包み込むこと。

問2　傍線部A「友達に本音を話すために求められる条件」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 13 。
① 自分がその人に本音で話した内容を、自分の許可なく他の人に話さないという義務を果たしてくれるという信頼が持てること。
② 自分がその人に秘密を打ち明けたとき、その内容をきちんと受け止め、自分の許可なく口を挟むことはしないという信頼が持てること。
③ 自分がその人に本音を話すとき、その会話を自分の許可なく他の人が聞けないような状況をつくってくれるという信頼が持てること。
④ 自分が話した秘密を守ってくれるという信頼と同時に、相手から打ち明けられた秘密を守ることができるという確信が持てること。

問3　空欄 1 に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 14 。
① 先駆的な　② 実験的な　③ 手垢（てあか）がついた　④ 矛盾した

問4　傍線部B「欲求が人間を不自由にする。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 15 。
① 欲求は自分が選択したものではないので、それに従う行為は自分の自由を放棄して自分以外のものからの強制に基づいて行動することを意味するということ。
② 欲求は自分が望んで生み出したものではないので、それに従うということは自分が望まないタイミングで行動をとってしまうことになるということ。
③ 欲求が発生してしまうとその後の行動は全て欲求に基づいて強制的に決められてしまうので、選択に自分の意思が介在できなくなるということ。
④ 欲求は人間に強制的に課せられるものなので、それに抵抗しようとすると労力と時間を取られ、結果として自由を失ってしまうということ。

問5　本文から次の文が脱落させてある。元の位置は（i）～（iv）のうちどこか。次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 16 。

> 自分だけを例外扱いする規範を望むとき、「私」は依然として自分の欲求の奴隷になっているのであり、他律的に生きていることになるからである。

① （i）　② （ii）　③ （iii）　④ （iv）

問6　傍線部C「カントにとって両者はまったく異なる概念である。」とあるが、カントにとって「愛と尊敬」はどのような点が異なるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 17 。
① 愛とは他者と「私」の隔たりを一定に保ちながら他者を理解しようとすることであり、尊敬とは他者を単なる道具とは違うかけがえのないものとして尊重することである。
② 愛とは他者を「私」と同一視してできるだけ近づこうとすることであり、尊敬とは他者の自由や自律性を尊重して一定の距離を維持しようとすることである。
③ 愛とは他者と「私」の間の距離をできるだけ近づけることであり、尊敬とは他者と「私」の間の距離をできるだけ遠ざけることである。
④ 愛とは他者と「私」が隔たりを解消しようとお互いにひかれあう働きであり、尊敬とは他者が「私」を一方的に引き付ける働きのことである。

問7　傍線部D「カントの考える理想的な友情」とあるが、それはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 18 。
① 二人の人が、互いに相手に対して愛と尊敬をバランスよく抱き、友情に課せられる義務に従うことによって成立するもの。
② 二人の人が、相互に道徳的な義務に従って行動することを通じて、互いへの信頼を確かなものとすることで成立するもの。
③ 二人の人が、相手が自分に対して示す愛と尊敬と同じくらいの愛と尊敬を返し、自己中心的な欲求に打ち勝つことで成立するもの。
④ 二人の人が、他者が侵すことのできない「私」の自由や尊厳を主張しながら、相手の自由や尊厳を受け入れることを通じて成立するもの。

問8　空欄 2 に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 19 。

①　リセット　②　アップデート　③　デリート　④　アナライズ

問9　筆者の考えとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 20 。

①　友達に話した本音や秘密は、その友達の暴露によって自分の知らないうちに他人に伝わってしまう可能性があるので、そのようなことを話す相手は慎重に見極めなければならない。

②　互いに本音を言い合うことのできる関係こそがカントのいう「道徳的友情」であり、それを成立させるためには、相手への愛と、欲求を抑える力を持った相手への尊敬の両方を持つ必要がある。

③　欲求とは自分の意思と関係なく強制的に湧いてくるもので、それに抵抗することは非常に困難なため、欲求を受け入れたうえでそれが強くなりすぎないよう折り合いをつける必要がある。

④　友情を成立させるには相手から尊敬されなければならず、自分に尊敬を集めるために他者を使ってうまく立ち回れる人が理想的な友情を成立させることができる。

三　次の文章を読んで、後の問い（問1～9）に答えなさい。

科学の世界で、たいへん重要なことがまずある。それはわれわれの脳の典型的なはたらきである意識が、主観だということである。主観とはつまり、客観性が欠けるということである。だから古典的な科学、つまり十九世紀風の科学では、意識は自然科学のなかに入れてもらえなかった。そういう対象の研究は、どうぞ文学部でおやりください。だからいまでも、心理学は文学部にある。文学などは「主観的」なものだから、自然科学では扱わないという約束事があったのである。心理はその主観に属すると見なされた。

それは一面では正しいが、別な面からすると、ずいぶんおかしい。なぜなら、自然科学もまた、意識を除いてしまったら、成り立たないからである。

それなら感情や情緒はともかくとしても、論理の部分だけなら、脳のはたらきは科学になるのではないか。実際にいまでは、論理的な作業はコンピュータにやらせることができる。論理的な作業が高級だと思っていたのは、その意味では間違いだった。そういう作業なら、コンピュータでもできることがわかってしまったからである。逆にいまでは、コンピュータに可能なことはなにかを考え、それをやらせながら、脳がどのようにはたらいているかを考えることまで、できるようになってきた。ほんのわずかだが、A「脳を作る」ことが部分的に、少しずつ、できるようになってきたともいえる。

以前に思われていたように、論理的な作業は高級なものではない。機械でもできることなのである。そういう見方をすれば、客観的でないといわれた「主観」のほうが、解明するのがむずかしい現象になってきたのである。むずかしい問題が高級な問題であるなら、主観のほうがずっと高級であろう。

こうしてともあれ、いまでは意識が科学の対象になりつつある。古典的な自然科学、心理学のほかに、だから認知科学などと呼ばれる分野ができてきたのである。認知科学の範囲は、実際のわれわれの脳のはたらき、あるいは計算機のはたらき、そういうものを総合的に扱うことである。こうした分野がどんどん発展をはじめたということは、古典的な意味での自然科学だけでは、もはや脳の問題は解ききれないことがわかってきたからだともいえる。

自然科学が意識を扱わないという原則があった時代には、たとえ脳を調べる専門家でも、脳を調べても心はわからないという結論を出すことがあった。有名なのは神経細胞の生理学でノーベル賞を受賞したジョン・C・エックルス、あるいはカナダ生まれの脳神経外科医で、大脳皮質の機能的な地図を描いたワイルダー・ペンフィールドである。かれらは晩年になって、「脳をいくら調べても、心のことはわからない」と主張したのである。もちろん若いときには、逆の考え方で研究をしていたはずである。

なぜこういうことが起こるか、それはむずかしい問題である。しかし、この二人の著名な神経科学者が、嘘をいっているわけではない。本気でそう感じるようになったはずである。だから、脳のことをよく日常的に知っていても、脳と心は違うという結論をだすことは、あり得るのである。

この二人の場合に、重要なことは、まず第一に二人がキリスト教文化圏の人だということである。キリスト教では、もともといわゆる心身二元論を採用しやすい傾向がある。人が死ねば、身体はこの世に残るが、魂は神のもとに帰る。たとえ意識してそう教えていないとしても、文化全体として、そうした「雰囲気」を持っている。

ある年齢に達してからは、人はどうしても死後のことを思うようになる。さらにまた、古い文化のなかにおだやかに浸って、心の満足を得ようとする。日本でも、西欧文化を研究してきた人たちが、晩年に 1 のは、いっこうに珍しいことではなかった。

だから、自分の生きているあいだに、脳と心の問題が解けないことがわかるなら、心身二元論を採用して少しも不思議ではない。

さらにもう一つ、問題がある。それは、科学とはなにかという問題である。意識が科学を作っているとするなら、その意識自体が脳の機能であるということは、科学の普遍性に問題を生じる。このことはなかなか困難な問題を含んでいるので、機会があればあらためて考えてみたい。

それにしても、エックルスやペンフィールドのような優れた研究者たちが、そうした問題について考えなかったはずがない。そして、もし考えたとすれば、かれらの時代にこの難点を避ける最良の考え方は、脳と心を分離することだったのである。心身が二元であれば、つまり両者が本質的に別なものであれば、脳の自然科学的研究と、心の問題は分離することができる。

もちろん、ていねいに考えれば、脳と心は別だとする考えも、脳を調べれば心はわかっていくが、完全にわかるということはないという立場も、ほとんど同じだということに気づかれるであろう。脳と心は別だという言い方は、後者の 2 を述べたともいえるからである。

こうして話は前章に述べたところ(注1)に戻ってくる。すなわちB科学的知識は、最終的な「真実」に到達するのか、という問いである。もちろん私はそうは思っていない。ちょうどいま地球上に存在している生物種が、同じ種のままで永遠に存続する保証はないのと同じように、いま通用している自然科学的な「事実」も永遠ではない。だからといって、いま生きている種が将来の種のもとになるかもしれないように、いま知られていると思われていることが、将来のより優れた考えのもとになるかもしれないのである。

こうして生物は進化し、考えも進化する。進化して、どこに究極的にたどり着くのか。それはわからない。そんなことを知るより前に、あなたの寿命がなくなることは保証できる。

これまで文学や哲学のなかでは、あるいは神秘主義的な宗教を主張する人たちからは、脳と心の関係について、さまざまな疑問が出されてきた。脳の科学は、そのすべてに答えることは当然できない。それでも、脳や心の理解について、どうすればわれわれの知識を進めることができるか、それについて答えることはできる。それを実証的に理解しようとすればいいのである。

もちろんそこでは、逆の問題も起こる。従来の自然科学が、たとえば意識の問題を「主観」として排除してきたことである。こんなことは、脳の科学のなかでは、もはやできないであろう。もちろん科学者であれば、私は自分の研究のなかに意

識などという問題は含ませない、と個人的に決断することはできる。そうできるだけではなく、それはそれで立派な態度であろう。従来の自然科学は、むしろそういう態度をとってきた。

しかし、C だれでもそうしなければならないという考え方は、もはや許されない。少なくとも、科学であれば、意識などという主観的な現象は「対象にするべきではない」という考えは、とることはできないであろう。なぜなら、科学を成り立たせているのは、われわれの意識にほかならないからである。だれも、意識のない人が、科学論文を書けるとは思わないはずである。それなら意識は科学の重大な前提であり、それを調べることは、科学の作業にならざるを得ないのである。

意識のような現象は、実証的な科学の対象にはならない。そういう考え方は、たしかに強かったと私は思う。いまでもそれが、心理学や人文科学の対象だと思っている科学者は多いはずである。もはやそれは、一種の社会的 3 というしかない。なぜならいまの科学は、社会的に統制されており、その社会のなかでの常識にそぐわない仕事は、なかなか科学上の仕事と認められないからである。多くの科学者は、単に「意識は科学の対象にしない」、そうした社会的統制に従っているだけかもしれない。

D 脳と心の関係を論じた最後に、この二つの関係について、私の本音を述べておこう。脳と心がつながらない。それはある意味では当然のことである。脳は百三十億の神経細胞が含まれた、大きな器官だからである。その複雑さはじつは恐るべきものであって、単純にことばで百三十億の細胞などと一言で表現して済むようなものではない。これがどれだけ面倒で複雑な存在かは、われわれ人間が、脳などかけらも持たない大腸菌一つすら、人工的に作ることができないことを考えてもわかるであろう。問題はそこなのであって、それ以外のことではない。そこで神秘主義に逃げ込んだりするのだが、ここまで面倒なものがあるということを、そういう人は素直に見ようとしないだけである。芸術は爆発だ、といった人がいたが、科学は爆発して済むものではない。きちんと、順ぐりに、手順を踏んで理解していくしかない。まことに幾何学には王道はないのである。

（養老孟司『考えるヒト』による）

※問題作成の都合により、一部省略・改変した箇所がある。

（注1）前章に述べたところ＝自然に起こるできごとや問題に対し、「私たちは正しい答に無限に近づくことはできるかもしれないが、正しい答そのものを手に入れることはできない」というもの。

問1 傍線部（ア）「典型的な」・（イ）「著名な」は、本文中ではどのような意味か。最も適当なものを、下の各群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 21 ・ 22 。

（ア）典型的な 21

① 特徴をよく表している。
② 実態の解明が容易な。
③ 目立たない。
④ 最も重要な。

（イ）著名な 22

① 人としての評価が高い。
② 多くの本を著している。
③ 若いころから活躍している。
④ 名前がよく知られている。

問2 傍線部A「『脳を作る』ことが部分的に、少しずつ、できるようになってきた」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 23 。

① 脳しか行えないと思われていた論理的な作業をコンピュータができるようになり、コンピュータと人間の挙動の比較から脳のはたらきが明らかになってきたということ。
② 論理的な作業をコンピュータにやらせる過程で、脳のはたらきが自然科学の対象になるかどうかの議論の有力なヒントが得られたということ。
③ 論理的な作業など脳のはたらきの一部をコンピュータに代替させる過程を通じて、脳のはたらきそのものが徐々に明らかになってきたということ。
④ 論理的な作業をコンピュータにやらせる一方で、論理的な作業が高級であるという命題の真偽について考えられるようになったということ。

問3 空欄 1 に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 24 。

① 外国に移住して、西洋風の生活をする
② 最先端技術を取り入れた、便利な生活をする
③ 研究から離れて、悠々自適の生活をする
④ 和服で畳の上で、純日本的生活をする

問4 空欄 2 に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 25 。

① 極限　② 中庸　③ 要点　④ 逆説

問5 傍線部B「科学的知識は、最終的な『真実』に到達するのか、という問い」とあるが、筆者はこの「問い」についてどう考えているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 26 。

① 将来的に生物は進化していき、それに伴って考えも進化していくので、いつの日か科学が最終的な「真実」に到達する可能性は十分にあると考えている。
② いま通用している科学的知識は将来のより優れた考えのもとになっていくので、長い時間はかかるが最終的な「真実」に到達するだろうと考えている。
③ いま科学的知識を持っている人という種が永遠に存続する保証はなく、種が存続している間に最終的な「真実」に到達することは困難だと考えている。
④ 現在「事実」として知られている科学的知識が今後どう進化するかはわからないため、科学が最終的な「真実」に到達できるかどうかもわからないと考えている。

問6　傍線部C「だれでもそうしなければならないという考え方は、もはや許されない。」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 27 。

① 意識の問題を自分の研究のなかに含ませないという態度をとる科学者がかつては多くいたが、現代ではその態度が問題視されてきたから。

② 意識を持っているわれわれでなければ科学の研究は行えず、意識があることは科学が成立するための重大な前提であるから。

③ 意識という主観的な現象を科学の対象として認めなければ、だれも科学論文を書けず、これからの科学の発展が阻害されるから。

④ いまの科学者たちは、「意識を科学の対象とする」という社会的な統制に従って研究を行う者が多数派となっているから。

問7　空欄 3 に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 28 。

① 孤立　② 偏見　③ 責任　④ 変化

問8　傍線部D「脳と心の関係」とあるが、その「関係」について筆者はどのような考えを持っているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 29 。

① 脳と心のつながりを理解するために脳の複雑な構造を理解することには非現実的な困難が伴い、神秘主義的な説明に陥る人々がいるのもやむを得ないという考え。

② 脳と心のつながりを理解することは、脳の複雑な構造を順ぐりに理解していく科学的手順を必要とし、芸術よりもはるかに高度な精神活動であるという考え。

③ 脳と心のつながりを理解するときに脳の複雑な構造でつまずくのは怠惰さゆえであり、社会的統制に縛られたいまの科学は倫理的な側面で堕落しているという考え。

④ 脳と心のつながりを理解することは、脳の構造の複雑さから困難な道のりにならざるを得ず、科学のやり方で順ぐりに解き明かしていくしかないという考え。

問9　筆者の主張として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 30 。

① 意識は客観性に欠けるものとされ、研究は文学部で行われてきたが、脳と心を分離して考える心身二元論を採用したことで、いまの自然科学でも意識を扱えるようになった。

② いまでも依然として意識を科学の対象として認めていない科学者は多く、それは意識を科学の対象として扱おうとする社会の潮流に抵抗しようとしているからである。

③ 意識はかつて「主観的」なものとして自然科学から除外されてきたが、実際には科学に必要不可欠なものであり、それについての研究も当然科学の範囲に含まれるものである。

④ 意識は古典的な自然科学や認知科学では扱われてこなかったが、いまでは科学の研究対象となっており、将来的により優れた研究成果を生み出す可能性を秘めている。